

家庭

1981.8.6

戦前「女人芸術」や「婦人戦線」などの女性雑誌で、高群逸枝、平塚らいてつらと共に論陣をばった八木秋子さん（本名福島町出身）の著作集全三巻が完了した。八木さんの個人通信「あるはなく」を編集してきた相京範昭さん（三）の努力で実った、信じる道をひたむきに生きてきた女の自立の軌跡である。八木さんは現在八十五歳。東京都立の養育院で、病身を横たえ、自らの老いと向き合う日々を過ごしている。その八木さんと若い親友相京さんが出会ったのは、昭和五十年のこと。「二月月に二回くらい八木さんの四畳半を訪ねて話を聞いて



さらば、われ、わかれ旅を遂いと不安に買ぬかん。

八木秋子さんの著作集

自立の軌跡、3巻
親友の支えで完結

るはなく」の刊行をはじめた。八木さんの著作集「近代の



八木秋子さん

五十三年に出版された第一集は、昭和初期に女性雑誌などに寄稿した評論や小説が主な内容。第二集は、戦後、母子寮の寮母をしながら書いた作品が中心。第三集は、戦後、母子寮の寮母をしながら書いた作品が中心。第三集は、戦後、母子寮の寮母をしながら書いた作品が中心。

「負」を背負う女、Ⅱ「夢の落葉を」、Ⅲ「異境への往還から」の全三巻は、こうした八木さんと相京さんの交流の中から生まれた。第二集の刊行から二年半ほどかけて出版された第三集には、戦前のアナキスト運動「農村青年社」の関係で投獄され、その後満州（中国）に渡った八木さんの満州での思い出や引き揚げ体験、母子寮に身を寄せながらも、たくましく生き抜こうとする母たちの記録、六十五歳前後の実生活をつづった日記などが収められている。どのような場面でも、自立を強く希求する生き方には、目をみはらされる。いま、個人通信「あるはなく」は、「八木さんの生の声を

伝えるられなくなったので「十五号で休刊。今後二回にわたって八木さんの原稿や手紙、読者からの手紙などで構成した。休刊号」を出し、「あとは、古い、と厳しく聞いている八木さんの奇蹟を待つて刊行していきな

い」と相京さんは語っている。「近代の負」を背負う女、千三百円。「夢の落葉を」千八百円。「異境への往還から」二千円。ICA出版（東京都千代田区神田神保町一―四二、日東ビル2F）刊